御目付江

寄合醫師多紀安元儀、醫學館類燒ニ付、再建致し、醫道講釋、是迄之通取立度候得共、自力に及兼候ニ付而、江戸中醫師より、寄附銀有之候樣ニ致度旨相願、尤當時學館江出席不致面々も子孫に至り、出席も可致ニ付、何れとも年々壹貳匁づゝ寄附有之候樣相願候ニ付て、願之通申渡候、右寄附銀員數、御醫師之分は存寄次第、其外御醫師之弟子、幷陪臣醫師、町醫師、總而江戸中醫師よりは、貳匁を限り、年々寄附銀差遣候樣可致候、

右之通向々江可被相達候、尤西丸御目付江も可有通達候、

五月

〔日本教育史資料十九醫學〕舊幕府醫學館ノ設立、及同館ノ形狀等ヲ概記センニ、該館ハ幕府四百有餘家ノ醫官、醫學ヲ講ズル爲ニ設ル所ニシテ、初ハ皆此館ニ在ツテ勉學セザル醫官ハナシト云、近世文化以來素食遊息ノ者多ク、此館ニ入テ勉學スル者減ジタリ、然レドモ係ル行迹ノ者ハ、人之ニ齒スルヲ厭ヒ、有志者ノミ此館ニ入ルコトヽナレリ、○中略醫學生徒ハ、寄宿寮ト云ヘル一舍アリ、常ニ三十名ヨリ五十名ノ生徒アリ、生徒ハ官醫ノ子弟ニ限ル、

〔半日閑話十二〕安永二年癸巳九月廿四日

申渡之覺

半井出雲守
今大路安之助
名代
川口又十郎

醫術之儀は、人之命ニ掛り候事ニ而、壹人も用立候者出來候義、諸人の爲にて、醫を業と致候者は、別而心掛候義ニ候、安元醫學館取立候ニ付而は、彌相繼候樣、醫道心懸候者俱に、寄附銀等いたし、